

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成22年度派遣報告書

——カメルーン・ヤウンデ第1大学、バカ語、派遣期間(H22.8.2-H22.12.23)——

平成22年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程一回生

彭 宇潔

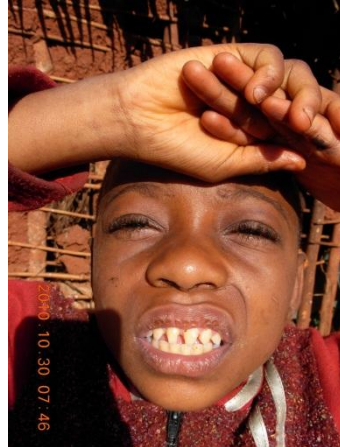
自身の研究テーマについて

ピグミー系狩猟採集民はカラハリ砂漠のブッシュマンと並ぶ、アフリカの代表的な狩猟採集民の一種である。成人男性の平均身長が150センチ程度と世界中で最も小さな体格を持つ集団として知られている。バカ (Baka) ・ピグミー (以下「バカ」と記す) は主にカメルーン・ガボン・コンゴ共和国・中央アフリカ共和国の熱帯雨林に居住している。本研究はカメルーン南東部の熱帯雨林で生活しているバカを対象とした、刺青を中心とする身体加工に関する研究である。

ピグミー系狩猟採集民バカは病気治療のため、よく顔に傷をつけて薬用植物の汁を塗るが、そのほかにも、おしゃれのため、あるいは何かの出来事を記念するために顔と体に刺青を施すことが多い。ピグミー系狩猟採集民の伝統医療に関する研究は多いが、治療以外を目的とする刺青に関する研究は少ない。一方、人類学において刺青に関する研究は多いが、アフリカのピグミー系狩猟採集民を対象とする研究はまったくと言っていいほどなされていない。刺青を施す部位やその模様は、それをしたバカにとってどんな意味があるのか、性別や年齢や地域によって施す方は異なるのか、いつ、どんな出来事があって刺青をしたのか、このような問題は体系的に研究されていないのである。また、バカは刺青の他に体に傷をつけたり (色をつけない「刺青」) 前歯を割ったりする身体加工もよくおこなう。こういった刺青を含む身体加工の研究から、バカの身体観、自然観、そしてそれらにかかわる社会関係に関する理解を深めることができると思われる。



1 バカ女性の刺青と人中の穴



2 前歯の加工

研修言語の概要

バカ語はサハラ以南のアフリカにおいて主流を占めるバントゥー系言語からはやや遠いウバンギアン系の言語を話す。同じ人種であるピグミー集団（ムブティ・バカ・アカ・エフェ等）は生活する地域が異なるので、言葉は近くの農耕民から影響を受けてまったく違うのである。バカ語には擬声語・擬態語が多くて、バカたちは動植物に詳しいため、それに関する語彙も非常に豊かである。

語学研修の内容について

ヤウンデ第一大学で9月中に3週間渡って、週5回12時から13時まで講義を受けていた。対一の授業で、二人の先生が英語で講義を行った。それぞれバントゥー諸言語の文・単語の構成と、アフリカ諸言語の発音及びその特徴についてであった。講義の最終回に、私はこの3週間習った全てをまとめて具体例を挙げ、そして中国語との相違についてプレゼンテーションさせていただいた。



3 ヤウンデ第一大学で勉強している風景

大学でバカ語を教えられる先生がないので、ヤウンデ第一大学でアフリカ言語学の基礎的な部分を学んだ後、私はフィールドに入って調査しながらバカ語をネイティブスピーカーから習った。一般的な方法はバカたちに聞きながら先輩たちの作った単語・文法集を勉強することであった。そして、自力で作成したバカ語の文章をバカたちに聞きながら直してもらう手段もよく使ってい

た。



4 バカと勉強している風景

研修期間中に印象に残った体験や経験

大学での講義は一対一であったが、先生たちの紹介でマスター2年の院生と知り合い、フランス語がほとんどわからない私をいろいろと助けてくれた。私の研究テーマやバカ語を全く知らない方であるが、お互いに研究や調査について楽しく交流できた。ヤウンデの市内観光から旅に出る時の注意事項まで心配してくれた。すばらしいカメルーン友達ができたと思う。

また、フィールドでバカたちと接触し、彼らの情熱に感動した。そこは熱帯雨林の奥にあるキャンプで、英語・フランス語が話せるバカはほとんどいない状況であった。たまには不愉快な出来事があったが、バカはすぐにそれを忘れて私の仕事を手伝っていた。単語の録音もバカ語作文の訂正もまじめにしてくれた。いつも予想以上の単語・文型を示してくれ、また私の調査にかかわることを教えてくれた。フィールドでバカ語をゼロからスタートしたが、バカたちの情熱のおかげで、基本的な調査ができるほどのバカ語力になった。

目標の達成度と反省点

バカ語は大学で習えない言語で、実際にフィールドに入ってから勉強できた。今まで使い慣れた外国語の勉強法が無効になったと言えるが、現地の人々のおかげで、たった2ヵ月半でゼロから日常会話レベルの語力になって、こんな達成度に自分も驚いた。

ただし、反省しなければならないことがある。それは事前にカメルーンの共通語のフランス語を身につけていない点である。大学での知り合いは英語ができるからとかフィールドでバカ語で十分だとかほっとしてしまった。もしフランス語ができれば、今のバカ語力がもっと上達できるはずである。そして、調査もバカにかぎらず周辺の農耕民とさらに交流できるはずである。これを検討しながら次回渡航の準備を行いたい。